⑤音楽

つながりを深めるミュージッキング

1　研究全体のテーマと音楽部テーマの関連

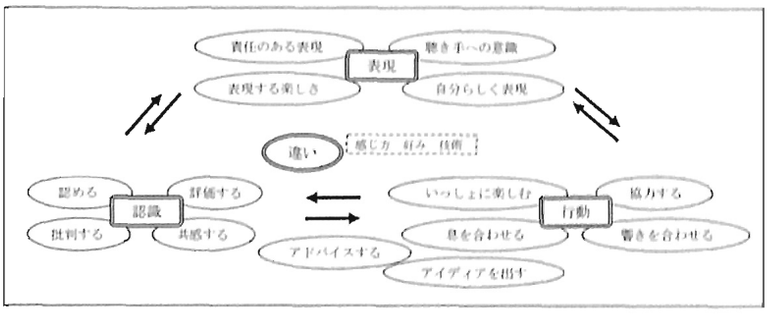
音楽部では，「他者と関わりあい，音楽の好みや感じ方，技能が人によって違うことに驚いたり，違和感を覚えたり，共感したり，認めたりしながら，それぞれの子どもたちが豊かな表現者として育っていってほしい」と願っている。これは全体テーマとして取り上げた「シティズンシップ教育」につながると考える。

「ミュージッキング」は「ある音楽表演に関与することであって，それは［歌ったり楽器を演奏したりして］表演そのものを担当することはもちろん，聴くこと，練習に参加すること（いわゆる作曲行為により）表演の素材を提供すること，あるいは踊ることすらも含めた，いってみれば，どのような立場からの関与でもよい」（SMALL 1998:9）という考え方である。この考え方は，それぞれの子どもの興味関心を生かし，多様な音楽表現を引き出す学習活動の支えとなっている。

関わりあうことを避けたり，子ども同士の関係が一方的であったり，互いを認め合えない状態では，豊かな音楽は生まれない。様々なつながりを深めて，安心して表現したり表現を伝えようしたりとする社会の担い手を育てていきたいと考えている。

2　音楽部で考える「公共性」

人と人との間には必ず違いがある。違うと思った時に，「それはいいね」というだけでなく「それはなんか変だな」と違和感を覚えたり，「自分は嫌いだな」と思うことを受け止めたりすることも大切である。そこからそれぞれの「自分らしさ」につながっていくのではないか。そして，違いがありながらも，一緒に楽しんだり，よりよいものをつくっていったりするために，自分のアイディアを出しながら，他者のアイディアも受けとめていく場面が大切になっていく。互いの表現を認め合いながら，自分の居心地のいい表現空間を築いていきたいと考えている。



3　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1)　子どもたちの姿

それぞれの段階で子どもたちの「公共性」がどのように見えたのかを，３つの事例を挙げて述べる。

【事例１】２年生　リクエスト

低学年の授業は，４人のリクエストから始まる。

Aは，自分のリクエストの番が来ると毎回同じ曲をリクエストする。「Aはあの曲だろ～」と他の子どもたちが言い，Aが「39番の≪南の島のハメハメハ大王≫です」というと「やっぱり～」という声とともに，一部の子どもたちは踊る準備をし始める。この曲を歌いながら踊るのが楽しくて仕方がないのである。歌の本をながめて自分なりに楽しんで歌う子どももいる。

【リクエストの約束事】
自分の好きな曲を歌集から選ぶ。
自分が知っている曲が条件。
選んだ曲をクラスのみんなで歌う。

Ｂは，立ち歩いたり，寝転がったり，落ち着かないことが多い子どもである。しかし，Ｂが好きな曲がリクエストされると，からだがすっと落着き，自分の場所に座って歌い始める。自分の好きではない曲だと，どこか居心地が悪い。

「選ぶ」ということで，自分の好きなものを表明できる場がリクエストである。その時に「この曲あんまり好きじゃないな」と思ったら，「嫌だ！」と声に出すことはなくても，心やからだのどこかで違和感を覚える。そういう気づきがあって「自分」というものが発見されていったり，自分にとって当然だと思っていることが他人に必ずしも共有されるわけではないことに気づいていったりする。他人の立場に立って想像する共感的な心が育っていく素地になると考える。

【事例２】４年生　ミュージックプラン

４年生以上では，ミュージックプランに基づく学習を日常的に取り入れている。

【ミュージックプランの概要】
曲・作品の自由…どんな曲でもよい。授業でやった曲でも，演奏したくて自分で探してきた曲でもよい。
方法・形態の自由…どんな楽器を使ってもよい。歌や踊りなど演奏形態は自由。
演奏者の自由…一人でもいいし，グループでもよい。
時間（進度）の自由…発表までの時間は自分が決める。２か月に１回は必ず発表する。

何でも自由なのではない。子どもたちはミュージックプランという計画表を持ち，見通しをもって活動に取り組んでいくことが必要である。発表をクラスのみんなで聴きあい，３～５段階で評価をする。発表された曲は，学びの履歴として音楽室内に掲示する。

この活動に取り組み始めた１学期，４年生の子どもたちの表現はあふれんばかりであった。好きな楽器を使ってもよい，どんな曲でもよい。子どもたちは，そのことに大いに興味を抱き，どんどん発表した。発表後には，聴いていた人が３段階（◎○△）で評価をする。その時の感想は，「Ｙさんが Ｚさんの方を向くのは気になる（アイコンタクトするのは変だと感じる）」「ピアノがずれているから，もっと練習した方がいいと思う（ピアノから他の演奏者が見えにくくタイミングが合わなかったことには触れず）」など，気づいたことを，感じたまま言うことが多い。

Ｃは，ほぼ毎回発表し，なかまで演奏する楽しさ，前に出て発表する誇らしさを感じている。ある時，６人グループで≪カントリーロード≫をトーンチャイムと木琴とキーボードで演奏した。発表後の評価は◎が多かった。その後の授業で，Ｃは４人グループで≪カントリーロード≫を前回とまったく同じ編成で発表し，発表後の評価でＤ１人が△に手を挙げた。「何で△なんだよ！」と反発するＣに対し，「トーンチャイムとピアノは合わないと思う」とＤは自分なりの考えを言った。Ｄは前回からＣと一緒に活動していて，今回の発表の練習時に「トーンチャイムとピアノは合わない」と言ったが，Ｃは「絶対合うと思う」と譲らなかった。その意見にＤは納得せず，結局，この発表ではＣとＤは一緒に活動しなかった。

好きな曲を好きなように表現する。そこには，音楽の感じ方や好みの違いがはっきり出ている。その違いに対する「すごいね」「かっこいいね」は受け止められるが，「それって変」など，自分が思ってもみない感じ方を受け入れることはまだ難しい。たくさんの表現や音楽に出会ってきたか，たくさんの違いを発見したり認めたりしてきたかが，中学年にとって大切なことであり，互いを認め合っていけるように中学年で耕していきたいことであると考える。

【事例３】６年生　ミュージックプラン

同じミュージックプランの活動をしていても，６年生では，発表回数がぐんと減る。自分の演奏の完成度を高くしたいという気持ちや，演奏する際に聴き手が存在するという意識あるように感じる。また，ミュージックプランの発表の曲がばらけ，自分なりの演奏がはっきりしてくる。評価は１～５の５段階でしているが，演奏結果だけではなく，その子が取り組んでいた過程や，演奏している時の姿もよく見て評価している。感想は，「木琴は１人１台使った方がよく響くよ」「ピアノの近くでやった方がずれないと思う」「トレモロがやりにくそう。もっとマレットを短く持ったら？」など，自分の経験を元にした意見やアドバイスが増えてくる。

Ｅ子は，授業中でも，周りの行動に気づかず，自分の世界にこもってしまう。自分から学習に取り組むことが苦手で，声をかけると「だって…」と言い訳をして，なかなか活動しない。今までのミュージックプランの活動でも，発表にこぎつけられず途中で諦めてしまうことが多かった。すぐに投げ出してしまうので，友だちと一緒に活動するということが難しかったのだが，周りの子どもたちがＭ子をやわらかく受け入れ始めるような変化が２学期頃から少しずつ起こってきた。２学期の終わりに≪トルコ行進曲≫を練習し始めたグループにＥ子は，タンバリンで加わっていた。ただいるだけ，ではなく「ここはこうやって鳴らせば？」とか「あの穴のあいたタンバリン（モンキータンバリン）の方がいいよ！」とグループ内でアドバイスを受け，関わりあって表現していた。そのグループが発表すると，聴いていた子どもたちの評価は４～５で，自分の役割をもって参加できたことに対する満足気なＥ子の表情があった。

（演奏者した子どもの感想）	（聴いていた友だちより）
Ｍ子さんが入ったことで，はく力が出てよかった。少しはやくなってしまったことが反省。けど，この少しはやくなったのが，ある意味すごくよかった。（Ｆ子）	とっても上手だったよー！タンバリンを入れたのがよくて，はく力が出た。（Ｈ子）

（演奏した子どもの感想）
とちゅうはやくする所もうまくいってよかったと思う。（Ｇ子）

ミュージックプラン終了後，発表した子どもたちの感想は以下のように書かれていた。

高学年では経験や技術，音楽世界が広がってくる。好みや感じ方は，どんどん多様になるが，自分を表現することに加え，他者の表現も受け入れるようになってくる。「私は私」「あなたはあなた」という「自分」と「他者」という違いを受け入れていると考える。その中で，フォローしあったり，あるところは任せたり，あるところでは譲れないものがあったりしながらも，共感したり，アイディアを出したり，アドバイスしあったりして認め合っていくことが少しずつ育ってきていると感じる。

(2)　３つの事例からの考察

低学年では，自分の好きなものにひたる喜びの域を出ず，嫌いなものとは距離がある。中学年になると，自分なりに仲間と作品を創り出す喜びを見出し，共感的な評価を受け止める一方で，自分とは異なる音楽表現を次に生かすのはまだ難しい。それに対し，高学年では，他者への共感や励ましが次への一歩，そしてさらなる表現欲求につながっている。また，他者の演奏に対して，今までの経験から得たことにからめてアドバイスする。それは，年齢や作品，場の状況などが関係しているのだろうが，求める音楽の質が変化することで，他者との関係性も変わっていくのではないかと考える。

＜参考文献＞
SMALL, Christopher 1998 *Musicking: the meanings of performing and listening.* Hanover, New Hampshire; London: University Press of New England; Wesleyan University Press..
徳丸吉彦　1996『民族音楽学理論』東京：放送大学教育振興会
山口修　2000『応用音楽学』東京：放送大学教育振興会

4　第71回教育実際指導研究会での授業提案や協議会討議を経て

(1)　部会として授業改善のために目指したことや，そのための手立て

・まずは自己を表明することを大切にする。「これがいいな」「こうしたいな」「私はこれが好き」はそれぞれの子どもたちで違うのは当然である。自己をのびのびと表現する場を保証する。

・友だちの表現を目の前にして違うと思った時に，「それはいいね」というだけでなく「それはなんか変だな」と違和感を覚えたり，「自分は嫌いだな」と思うことを受け止めたりすることも大切にする。

・共感や提案，批判をし，互いの表現を認め合いながら，自分の居心地のいい表現空間を築いていきたいと考えている。

・「自分を受け入れてもらえる」という安心感を大切にし，少集団での活動も取り入れる。お互いの声が行き来できる距離，その安心感の中で，やわらかく関わりあえるようにしていきたい。

(2)　具体的な成果や問題点

・これまでの積み重ねから，仲間の前で歌うなどの自分を表現することには全体的に前向きである。

・他者を受けとめながら一緒に創りだしていく時の関わり方（おりあいをつける，我慢する，あるいは新たな道を提案する）などという姿はまだ難しい面も見える。

・「違いはわかった！」「いいな，まねしよう」はできても，「違うね。じゃあ，どうやって仲間と表現を創り出そう」と考えることが大切である。そのためにはスキルも必要である。小学校の６年間では，どの発達段階でどのようなことを育てていくのかを音楽部として考えていくことが課題。

・音楽部が育みたいリテラシーを明らかにしていくことが必要。

(3)　協議会での話題・意見・質問など

・「聴く」に対する工夫はどうしているのか。「聴く」は「公共性」にとって大事なこと。

・「聴く」について…「聴く」は，意識が向かうということ。相手に向かう。

・「批判的」をマイナスに捉えない。そこを研究しているのは意味がある。

・（技能的に）もともと出来るという子どもでなくても，友だちと関わる中で，声をかけあったり触発されたりして，出来るようになっていく。「何がすでに出来るのか」ではなく，そうではない面を教師は見ていかなければならないのではないか。

・「公共性」として捉えた子どもの姿…授業の中で何気なく見られる。それぞれの子どもの良さを関わりあいながら生かす（フォローする，おりあいをつける）場面が見られた。

(4)　協議会を経て，今後の課題であると認識したこと

・「公共性」は即ち民主性を育てるということ。政治的リテラシーを育んでいきたい。

・「私」の意見を言える子どもを育てる。自分の責任を持って自分の意見を伝えることの大切さ。

・音楽は，みんなで１つのものを創っていけるもの。「その場にいる一員としての私」を体感することは大切である。自分のあり方をしっかりと出す。音楽は，それにより出来る一致したもの。違う人たちが一つになれる，という経験が音楽の中にはある。

・音楽の中から「公共性」（人と人との繋がり，それぞれが違うということ）を考えられるのだ，と，積極的に行動していきたい。